

2017年12月3日 礼拝メッセージ

聖書：使徒の働き 12章 18～25節

説教：神に栄光を帰する

はじめに

今日から、主のご降誕を待ち望むアドベントの季節に入ります。旧約聖書を通して、神は救い主を罪の世に遣わすのだと語り、イスラエルの人々はそれを聞いて、待ち続けました。その約束のとおり、今から二千年前、イエス・キリストが来られます。ところが、この方が救い主であると分かった者はほとんどありません。かえって人々は、神から遣わされてきた方を十字架につけて殺してしまいます。しかし、話はそこで終わりません。この方は三日目に墓の穴からよみがえり、弟子たちの前に四十日間現れて、天に上げられていきます。それから一週間して、天から聖霊が注がれた日、人々は心刺されて主に立ち返り、悔い改めてバプテスマを受け、エルサレムに最初の教会が建てられます。

しかし試練が待ち受けていました。教会の活動を苦々しく思っていたユダヤ教の指導者たちはクリスチャンを迫害し始めます。その迫害のあまりの厳しさから国外に逃れなければならない人たちもいました。それに加えて政治の世界からの迫害も加わっていきます。

1 ヘロデ・アグリッパ一世

1) 教会を迫害する

当時、イスラエルの王はヘロデ・アグリッパ一世と呼ばれ人で、不穏な動きがないか常に監視しています。最近気がかりなのは、キリスト教徒の動きです。彼らは、ユダヤ教を捨てて新しい教えであるキリスト教に回心

しているらしい。もしかして体制に批判的な考えを持っていて、ヘロデを倒そうとする集団ではないか。いっぽう、ユダヤ教指導者たちがキリスト教会のことで手を焼いているという事情もわかってきた。彼は計算します。危険思想をもつ教会はつぶすことにしよう。そうすればユダヤ教指導者たちにも恩を売ることができる。一石二鳥ということです。そこで早速、十二使徒のひとりである教会の指導的立場にあったヤコブの殺害を命じます。それがうまくいくと、案の定ユダヤ人たちがヘロデ王のしたことを評価してくれました。

2) ペテロを逃がしてしまう

これに気をよくしたヘロデ王は次にペテロを逮捕し、ユダヤ人たちの前で公開処刑する計画を立てます。ペテロが投げ込まれた牢は、多くの兵士たちが立って厳重に見張られていて、とても脱獄できるような所ではありません。ところが次の日に処刑されるというその前の夜、御使いが現れてペテロは不思議な方法で牢の中から解放され、教会の人たちと再会を果たします。

ペテロがいなくなって兵士たちは大騒ぎです。ヘロデはただちにペテロを捜し出すよう命令しますが見つかりません。ユダヤ人たちの支持を拡大させる折角のチャンスと目論んだのに、かえってヘロデの失敗が印象づけられる散々な結果になってしまいました。

3) ツロ、シドンの人々

そんなとき権力者は、しばらく雲隠れして、

人々の記憶が薄れるのを待つものです。ヘロデはユダヤ地方からカイザリヤにあった別荘に移動します。昨年イスラエルに行かせていただいたとき、カイザリヤにも行きました。ユダヤ地方があるエルサレムは山の上で寒いのですが、ここは地中海に面していて非常に暖かい。ローマ帝国時代に作られた水道橋や、数千人が入れるような円形劇場がそのまま残っていました。ツロヤシドンの町はカイザリヤから地中海沿岸に沿って車で二時間ほどのところにあります。

20 節を見ると、ヘロデ王はツロとシドンの人々を非常に憎んでいたようです。その事情はよくわかっていません。とにかくこのままでは食糧の供給が滞ってしまう。困り果てた住民は、カイザリヤに行き、ブラストという人を介して王と和解し、食糧の供給を再開してもらおうと陳情にやって来ました。そのとき事件が起きました。

2 神と人間

1) ヘロデの死

場所は円形劇場であったのかもしれませんが。王の演説を聴くために多くの人たちが集まっています。ヘロデ王はきれいに着飾り、王座にすわり、王としての威厳を見せつけます。王が立って演説を始めると、聴衆は「神の声だ。人間の声ではない」と叫びます。もちろん本気でそう言っているのではない。王さまのご機嫌をとるために心にもないことを言っているだけです。ところが、ヘロデは毒のある虫にかまれて死んでしまいます。ヨセフスという歴史家の書いた「ユダヤ古代誌」には、西暦 44 年にこの事件が起きたことがきちんと記されていて、このことが歴史的事実であることが分かっています。

2) 自分の栄光

なぜヘロデはこんな死に方をしなければならなかったのか。その理由について、23 節にこう書かれています。「するとたちまち、主の使いがヘロデを打った。ヘロデが神に栄光を帰さなかったからである。彼は虫にかまれて息が絶えた。」

神に栄光を帰さなかった。それで死ななければならなかった。そこで私たちは考えるわけです。「神に栄光を帰する」とはどういうことなのか。もしも私たちが神に栄光を帰さなかったなら、ヘロデのように死ぬかもしれない。これは大変なことだ。そんな不安を感じるでしょう。いったいどうすればよいのか。

先日、「背骨コンディショニングセミナー」に講師としてきてくださった日野先生が証ししてくださいました。先生は若いとき、非常に仕事もうまくいっていたときは、肩で風を切るような感じの勢いだったそうです。ところがあるとき、仕事もうまくいなくなり、お金も回らなくなる。借金取りに追いかけられるようになり、何ヶ月も財布の中にお札というものを見たことがない、このままでは生きていけないと思って区役所に行って生活保護の申請をしようとした。そうしたら「あなたは歩いてここに来たですよ。そういう方には生活保護は認められません」と言われて追い返されてしまった。最後の頼みの国にも見捨てられたと思ったそうです。その時初めて自分の生き方がどうであったのか、しみじみとわかった。今まで自分は神さまに背を向けて「俺様」で生きていた。その結果、今のこんなみじめな状態になってしまった。今日の箇所のテーマに即して言い直せば、神に栄光を帰さなかった、ということです。こん

なに金儲けできるのも、みんなから「先生、先生」と呼ばれてちやほやされるのも、全部自分の努力だ、能力だ、優れた才能があるからだ。全部、自分の栄光だ。そう思っていた。

ヘロデは、「神の声だ。人間の声ではない」と言われると心がくすぐられる。誰も着ることのできない王の服を身につけ、だれも座ることのできない王座に座る。気に入らなければ、人々が困ろうとも食糧を止めることができる。ペテロを取り逃がした兵士に、即刻処刑を命じることができる。人のいのちは自分の手の中にあります。できないことは一つもない。自分は神の力を持っている、栄光は自分のうちにあると思込みました。

でも実際はどうなのか。ペテロを嚴重に牢に閉じ込めたつもりだったのに、取り逃がしてしまいました。捜しても見つけることができません。兵士のいのちを指一本で簡単に殺すことができても、自分は小さな虫一匹にかまれて死んでしまった。結局そんなものだったのです。

日野先生は、どん底に突き落とされて初めて自分が何をしてきたか悟ったそうです。それまでは神に背を向けて「俺様」で生きてきた。しかしそれは間違っていた。神の方に向き直って、「神さま」で生きなければならない。そこで初めて神さまの栄光が輝いているのが見える。悔い改めて、新しいスタートを切ったとき、恵みがふり注いできて、今の自分がいると語って下さいました。

3 主のみことば

1) 成長する

世の中には御利益宗教というものがあります。これを信じたら、商売繁盛、無病息災、運気上昇、受験合格。そういう意味では、キ

リスト教はまったくさえません。むしろ信じている前に比べたらつらい目に遭うこともある。ユダヤ人から迫害され、ヤコブは殺され、ペテロはあやうく処刑されそうになる。あるときは大きな飢饉が起り、生きることさえ大変なことにもなる。それでも24節にはこうあります。「主のみことばは、ますます盛んになり、広まって行った。」

なぜでしょう。世の人たちの目には不思議に見えるでしょう。

2) 主の栄光

しかし私たちは不思議とは思いません。どうしてか。世の人たちの目には見えないものを見ているからでしょう。何を見ているのでしょうか。主イエス・キリストが十字架につかれたとき、私たちは十字架の周りに立って主をあざけり、ののしり、あんなみじめな姿になっているイエスという男には栄光などあるはずがないと叫んでいました。

でも主はこう言われたのです。「人の子が栄光を受けるその時が来ました。」(ヨハネ12章23節)「わたしが地上から上げられるなら、わたしはすべての人を自分の所へ引き寄せます。」イエスは自分がどのような死に方で死ぬかを示して、このことを言われたのである。」(同32, 33節)

主は神ですから栄光を受けるべき方であることは当然のことです。確かに栄光をお受けになりました。ところが、私たちが考えるような栄光を受けたのではない。私たちの罪の身代わりとなって、十字架でさばきを受ける。それがご自分にふさわしい栄光であると言われました。私たちはその主の十字架を仰ぎ見ます。人の目には栄光などないように見えます。しかし私たちには見えます。十字架

の上には栄光がある。その栄光を私たちは、永遠のいのちという形で与えられている。どれほどすばらしい栄光なのか。時々忘れてしまいます。「俺様」と言って自分の栄光に酔いたいときがある。でもよく考えると、そんなものは実にちっぽけな栄光なのです。

主の十字架の上に輝く栄光を仰ぎ見たいと願います。